

臼杵市公立学校のあり方に関する基本指針
～ これからの社会をしなやかに生き抜く
臼杵っこを育成する学校づくりに向けて ～

令和5年7月

臼杵市教育委員会

目 次

1. はじめに
2. 基本指針の位置づけと基本方針の策定に向けて
3. 白杵市が目指す学校教育について
4. 学校の適正規模・適正配置の基本的な考え方
 - (1) 適正な規模の考え方
 - (2) 適正な配置の考え方

1. はじめに

近年、人口減少や少子化を背景に、小・中学校において児童生徒数や学級数の減少による学校の小規模化が、全国的に進行しています。

義務教育の9年間は、人としての土台をつくる大切な時期であることから、児童生徒は知識や学力だけでなく、コミュニケーション能力や、多様な価値観、社会性、豊かな人間性などをバランスよく身に付けることが重要です。

学校の小規模化には、教員の目が児童生徒一人ひとりに行き届き、指導が充実するなどの良い面がある一方、人間関係が固定しやすく、子ども同士の交流や多様な意見に触れる機会が少なくなるなど様々な課題も指摘されています。

白杵市においても、少子化に伴う人口減少に歯止めがかからない状況にあり、今後は、さらにその傾向が進むことが予想されます。このことにより、小・中学校の更なる小規模化が見込まれるなか、義務教育の機会均等や教育水準の維持・向上の観点を踏まえ、小・中学校の小規模化に伴う諸問題への対応が継続的な課題となっています。また、白杵市内の学校施設については、多くの建物が建築後35年以上を経過、なかには建築後40年以上を経過する建物があり、老朽化が進行していることから、施設の老朽化対策、安全確保を図るための適切な維持管理が求められています。

今後は、これからの時代を担う子どもたちの生きる力を育む「白杵市の未来をたくましく拓き、超スマート社会をしなやかに生き抜く、白杵っこの育成」に向け、教育の質の充実と教育環境の創出を目指し、課題解決に向けて取組を進める必要があると考えます。

2. 基本指針の位置づけと基本方針の策定に向けて

(1) 基本指針の位置づけ

この「白杵市公立学校のあり方に関する基本指針(案)」(以下、「基本指針」という。)は、これからの社会をしなやかに生き抜く白杵っこを育成する学校づくりに向けての基本的な方向性を示すものであり、白杵市公立学校のあり方庁内検討委員会(令和4年度設置)で検討した適正規模・適正配置の取組に関する基本的な考え方を記しています。

(2) 基本方針の策定に向けて

今後、白杵市教育委員会は、令和5年度に組織する「白杵市公立学校のあり方検討委員会」(以下、「検討委員会」という。)に、基本指針及び「白杵市公立学校のあり方に関する基本方針(案)」(以下、「基本方針」という。)の協議検討を依頼し、検討委員会の報告に基づき、白杵市総合教育会議と協議をしながら基本方針の策定に向けて取組みます。

さらに、地域の実情に応じた学校のあり方を模索するために、学校運営協議会や地域振興協議会と連携しながら、地域や保護者の方々の意見を踏まえ取組を進めていきます。

3. 白杵市が目指す学校教育について

現在は社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」といわれています。また、世界的規模で平和や環境問題への対応を迫られるなど先行きが不透明な状況もあります。学校教育においては、そのような予測困難な状況において、子どもたちが、これからの社会を生き抜いていくための基盤となる力を総合的に育成することが求められています。

全国的な過疎化や少子化を背景に、白杵市の小・中学校においても児童生徒数や学級数の減少による学校の小規模化が進行しています。そのような情勢を踏まえ、白杵市教育委員会では、教育方針を「白杵の未来をたくましく拓き、超スマート社会をしなやかに生き抜く、白杵っこの育成」と設定し、「3つのきょう育（郷育・協育・響育）+今日育」を土台とした教育に取り組んでいます。

『郷育』では、「農泊体験学習」や「白杵っこ検定」など、地域素材を生かして「郷土（ふるさと）を愛する心」を育成しています。『協育』では、「幼小中一体教育」による幼小中連携や、コミュニティースクールによる学校・家庭・地域のつながりを大切にした教育活動を推進しています。『響育』では、自分と他者との関りを意識しながら、それぞれの思いが響き合う教育を目指しています。それに加えて、それぞれが「今日育」（子どもたちの未来のために今日すべきことは今日行う「機を逃さない教育」）を意識し、白杵の未来を担う白杵っこの育成に向けた取組を実施しています。

そのような中、令和3年1月26日に中央教育審議会答申において「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」が示されました。本答申では、『令和の日本型学校教育』の姿として、全ての子どもたちの可能性を引き出す、『個別最適な学び』と、『協働的な学び』の実現が重要であると示されています。

本市においても『個別最適な学び』と、『協働的な学び』を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげ、教育目標の達成をめざすための具体的な取組を推進しています。

『個別最適な学び』については、指導方法や指導体制の工夫改善やICTの活用により、「個に応じた指導」の充実を図ります。『協働的な学び』については、子ども同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、議論できる場の設定を大切にします。これからの社会を生き抜く子どもたちには、正解のない課題に対し、自分の考えと他者の考えをよりよく擦り合わせながら議論を重ねることを通して、対話力（聴く・考える・話す）を育成することが重要であると考えます。

教育委員会では、目指す学校教育の実現のためには、社会や時代の変化を踏まえて対応していく必要があると考えます。そのため、白杵市立学校のより良い教育環境をつくり、充実した学校教育の実現に向けて、学校の適正規模・適正配置を推進するものとします。

4. 学校の適正規模・適正配置の基本的な考え方

(1) 適正な規模の考え方

適正な規模について、白杵市では小・中学校の小規模化傾向が見込まれることから、学校の適正な規模について整理を行います。

一般的な小規模校のメリット・デメリット（例）

	メリット	デメリット
子ども・保護者の視点	<ul style="list-style-type: none"> ○(複式授業を解消できる場合は)一人ひとりに教員の目が届きやすく、個に応じたきめ細かな指導が行いやすい。 ○相互の人間関係が親密となり、深まりやすい。 ○学校行事等において、個別の活動機会を設定しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○集団の中で、多様な考えに触れ学び合う機会や切磋琢磨する機会が少なくなりやすい。 ○親密となる反面、人間関係の評価等が固定化しやすい。 ○学校行事等において、集団での教育活動ができにくい。
教員の視点	<ul style="list-style-type: none"> ○全教職員間の意思疎通が図りやすく、相互の連携が密になりやすい。 ○保護者や地域等との連携が図りやすい。 ○施設設備の利用時間や場所の調整がしやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学年別や教科別の職員同士で研究や相談や協力等の支援体制が構築しにくい。 ○1人あたりの校務分量が多く負担が大きくなりやすい。 ○経験、教科などの面でバランスのとれた教職員配置を行いにくい。

また、学校小規模化傾向への対策については、児童生徒への影響を中心に考えます。教育水準の維持・向上の視点に加え、学級数や児童生徒数等の様々な観点から整理していきます。

- ① 小規模化及び複式学級が存在することによる学校運営上の課題
 - ② 教職員数が少なくなることによる学校運営上の課題



学校運営上の課題が児童生徒に与える影響

以上の課題を整理しながら、文部科学省が示す「学級数を基準とした適正規模の定義」等を参考に、臼杵市における適正規模の基準を検討し、その定義について提示します。

(2) 適正な配置の考え方

- ① 臼杵市が目指す学校教育の実現に向けて、小中学校の適正配置を検討します。
- ② 臼杵市が目指す学校教育の実現に向けて、小中一貫教育制度の導入を検討します。
- ③ 小中一貫教育制度導入の検討に合わせた通学区の見直しについて協議をします。
- ④ 通学実態の多様化・広域化を踏まえ、通学距離の基準に加えて、通学時間の基準を設定する場合の目安を提示します。

以上、適正な規模・適正な配置の考え方の指針とし、具体的な内容については、令和5年度組織の「臼杵市公立学校あり方検討委員会」において、「臼杵市公立学校のあり方に関する基本方針（案）」を検討するなかで、適正な規模の基準や適正な配置の取組等を整理していきます。